第六回極東熱帶医學會附帶展覽會

日本医學歴史資料目錄

九州帝國大學工學部
808566
1929年 8月5日
數學物理學教室

理学部　和　遡及
022132005000597
九州大学蔵書

九州帝國大學理學部
8832
物理學教室

第六回極東熱帶医學會附帶展覽會

日本医學歴史資料目錄

九州帝國大學理學部
8832
物理學教室

序

第六回極東熱帶醫學會の附帶事業として醫事展覽會を催ほすに際し、當事者等は特に意を我日本醫學歷史の資料に致し、「日本醫學史」著者文學博士醫學博士富士川游氏東京帝國大學名譽教授醫學博士吳秀三氏を煩はすに至れり。兩博士の日本醫學歷史に於けるや既に名ありて茲に絮說を要せざる所。加之、官公私各方面の諸家亦た深く展覽會の擧に賛し、貴重なる資料を貸與せらるゝありて、茲に極はめて豐富にして且系統的なる日本醫學歷史の資料を展覽に供するを得るに到れり。

今其目錄を編むに際し吳・富士川兩博士及び幾多の資料を快く貸與せられたる各方面の士に衷心謝意を表すること然り。

大正十四年十月

第六回極東熱帶醫學會
展覽會部長　宮島幹之助識

19.1.20
158985

本展覽は日本醫學の發達と、それの西洋醫學並に支那醫學との交渉を、年代を追ひ又一部は科目を分けて、一目の下に瞭然たらしめんことを目的としたり。而して其年代に就きては、明治革新を以てその終りとし、その圖書は凡てその代表的のものゝみを選びたり。

吳　秀　三

日本醫學歷史資料展覽目錄

第一　古代より室町末に至るまで醫學一般に關して

一　僧勸勒（クワンロク）　像有　　吳秀三出品

百濟より推古天皇の十年（西暦四一四）に來朝せる僧にして醫家なり。推古天皇の勅命により、三人の書生之に就きて醫學を修めたり。

二　大寶令　令義解の一部　　帝國圖書館出品

文武天皇の大寶元年（西暦七〇一）勅定と稱す。これ今より千二百年前なり。醫疾令には醫官醫校醫制・學位等の事を含めり。

三　僧鑑眞（カンジン）（奈良の唐招提寺安置木像を寫す）　像有　　吳秀三出品

孝謙天皇の天平勝寶五年（西暦七五五）來朝せる唐の僧（六八七——七六三）にして、律宗の開祖なると同時に、醫學に通じ、藥物に精しく、勅命によりて本草に揭げたる植物の內、我邦にあるものを鑑定せり。その來朝は今より千百年程前なり。

四　出雲廣貞（イヅモノヒロサダ）　像有　　吳秀三出品

平城天皇の時の侍醫兼典藥助にして、安部眞貞（アベノマササダ）とともに勅を奉じて、國造縣主諸國の神社・名族舊家より傳

來の藥方を徴集して、大同類聚方を編纂せり。（脫稿ほ大同三年（西暦八〇八）にして、今より千百年程前なり。但し現存する書物はいづれも眞僞不定なり）

五　出雲廣貞木像記　　吳秀三出品

天保十四年（西暦一八四三）御醫山本逵所（一七九五——一八六八）が、右木像を得たるを記せるなり。

六　大同類聚方　出雲廣貞・安部眞直編集　著作年代　八〇八　一百卷　寫本　　吳秀三出品

今の世に傳はるは何れも僞書なり。此に出せるは出雲本と稱し一百卷を九冊とし、原本は東大圖書館にありしが、大正十二年燒失せり。此は吳秀三藏本を三浦千春が伊勢本・豐後本など稱するものに校合せるなり。

七　金蘭方　菅原岑嗣（スガハラノミネツグ）（七三二——八六九）撰　著作年代　凡八七〇　五十卷　刻本　五冊　　吳秀三出品

今の世に傳はるは僞撰なり。此書もその一なり。文政九年（西暦一八二六）岩田三谷が校刻出版せるものにて、二十三卷五冊に纏めたり。

八　本草和名　深根輔仁（フカネノスケヒト）撰　著作年代　凡九〇〇　十卷　二冊　刻本　　岡田信利出品

我邦の藥物一千二十五種を擧げたり。此に出せるは寛政中（西暦一七九〇頃）刊行のものなり。

九　肯像（クヒノゾウ）丹波康頼（タンバノヤスヨリ）（九一二——九九五）　　吳秀三出品

丹波康頼は圓融天皇の天元五年（西暦九八六）鍼博士丹波介として、病源候論等隋唐の方書より拔きて、醫心方三十卷を撰べり。是我邦の古代に於ける醫書中、最も精確にして且浩瀚なるものなり。引用書中には、太素經・新修本草の如き現今支那に傳はらぬものあり。

一〇　醫心方　丹波康頼撰　著作年代　九八六　三十卷　寫本　　東京帝室博物館出品

此書は元一本は仁和寺文庫にありしを、寛政中德川幕府に於て謄寫して、醫學館に藏せしがそは殘缺本なり。猶一本は正親町天皇より、典藥頭半井（ナカライ）氏に賜はりて同家にありしを、安政中德川幕府より醫學館に提出せしめて、醫官多紀（タキ）元堅（ゲン）・喜多（キタ）村直寛等に命じて、謄寫し校勘し上梓せしめたり。その刻本世間に流布すれど、今此に出せるは、多紀・喜多村等が謄寫原本なり。三十個の卷物とす。

一一　康頼本草　丹波康頼撰　著作年代　不詳　二冊　續群書類聚本なり　　帝國圖書館出品

一二　素問　著者？　著作年代　？　十二冊　刻本　　吳秀三出品

黃帝素問と稱す。唐の王冰註の書なり。同じく醫心方に引用す。

一三　靈樞　著者？　著作年代　？　六冊　刻本　　吳秀三出品

又鍼經と稱へ、鍼刺に關する說を述べたり。唐の王冰の註解したるもの今に傳ふ。

一四　黃帝內經太素　三十冊　寫本　　吳秀三出品

醫心方に引用する支那の醫書にして今は彼に傳らず。

一五　病源候論　隋の巢元方撰　著作年代　七世紀の初　五十卷　刻本　　帝國圖書館出品

支那內科各論の最初のものにして、所說最も切實的確なり。

一六　千金要方　唐の孫思邈（五八一——六八二）撰　一冊　刻本　　東京帝室博物館出品

支那に於ける古代の治方書なり。

一七　新修本草　一冊　寫本　　吳秀三出品

醫心方に引用する支那の藥物書にして、現に支那に傳はらず。

一八　肖像　丹波雅忠（タンバノマサタダ）（一〇二一——一〇八八）　　吳秀三出品

白河天皇の時の典藥頭にして、當時日本の扁鵲とまで稱へられたり。永保元年（西暦一〇八一）看唐の方書によりて、救急方を選擇して醫略抄を著はせり。此書は吾人をして醫心方とともに此時代に於ける醫學隆盛なりし跡を忍ばしむ。

一九　醫界抄　丹波雅忠撰　著作年代　一〇八一　一冊　刻本　　帝國圖書館出品

二〇　長生療養方　釋蓮基（シャクレンキ）撰　著作年代　一一八四　二冊　刻本　　帝國圖書館出品

續群書類聚に收めたり。一般衛生即ち長生の方書なり。

二一　頓醫抄　梶原性全（カヂハラノシヤウゼン）撰　著作年代　一三〇三　五十卷　寫本　　東京帝室博物館出品

日本文にて一般の和漢方の醫書なり。

二二　覆載萬安方　梶原性全撰　著作年代　一三一五　六十二卷　寫本　　東京帝室博物館出品

二三　醫談抄　惟宗具俊（コレムネノトモトシ）撰　著作年代　十三世紀の末　一冊　寫本　　吳秀三出品

醫事に關する經驗談なり。

二四　醫家千字文　惟宗具俊撰　著作年代　一二九三　一冊　刻本　　吳秀三出品

醫學醫事に關することを、一千語にて書きたるものなり。

二五　病の草紙　春日光長（カスガノミツナガ）（十三世紀の初）畫　著作年代　十三世紀　川擧寫　　東京帝室博物館出品

二六　病の草紙　春日光長（十三世紀の初）畫　著作年代　十三世紀　肖哲寫　一卷　　東京帝室博物館出品

鎌倉時代の有名なる畫家春日光長（土佐三筆の一人）の筆なりと云ひ傳ふ。よく其頃に於ける醫學的見解の跡を殘す。

二七　病の草紙　春日光長筆と稱す　異本とも二卷　寫本　　富士川游出品

その一卷は多紀元簡が寛政十二年（西暦一八〇〇）仲永丹をして摸寫せしものなり。

二八　病の草紙　拔寫　二卷　寫　　吳秀三出品

右は病の草紙中より精神病に關するものを拔き寫し、丹青を施せるものなり。

二九　福田方　僧有隣（イウリン）撰　著作年代　一三六〇　十二卷　寫本　　帝國圖書館出品

一般治療書にして、和漢醫書より抄出し、自說を差加へたるなり。

三〇　悲田方　僧有隣撰　著作年代　凡一三六〇　一卷　寫本　　富士川游出品

短き一般治療書なり。

三一　捧心方　中川某撰　著作年代　一四五一　二卷　寫本　　富士川游出品

三二　肖像　曲直瀨道三（マナセダウサン）（一五〇七——一五九四）　　吳秀三出品

曲直瀨道三は、其當時の支那（金元）にて行はれたる醫學を主張して、大に世に用ひられ、日本に於ける漢方

醫中興の祖と云はれ、今迄僧侶の手にありし醫學醫術は、漸く專門醫家の手に移る。其學派を秦・漢の醫學を主張する學派に對して後世學派と云ふ。

三三　全九集　僧月湖（ゲッコ）撰　著作年代　一四五二　七卷　二冊　　吳秀三出品

三四　啓廸集　曲直瀨道三（一五〇七——一五九四）撰　著作年代　一五七〇　八冊

三五　醫學天正記　曲直瀨玄朔（マナセゲンサク）（一五四九——一六三一）撰　著作年代　一六〇七　三冊　東京帝國大學文學部史料編纂掛出品

三六　太平惠民和劑局方　宋の陳師文撰　著作年代　十一世紀初　十卷　刻本二部　東京帝室博物館出品

同　十冊　刻本　帝國圖書館出品

宋の大觀中、勅令にて支那全國の名醫をして、良き治療方と思ふものを書き上げしめて、陳師文篇集せるなり。

三七　李東垣（一一八一——一二五二）の著書を集めたる東垣十書　帝國圖書館出品

金元時代の醫家の大宗といはれ治療上溫補を主張す。

三八　朱丹溪（李東垣同時代）の著書　格放餘論局方發揮金匱鈎元　帝國圖書館出品

同時代の醫家にして李と並べ稱へられ、兩人ともに和劑局方醫學とて、病氣を本とせず、處方を主として配劑するを排斥したる其當時の革新派にして、是れ所謂後世派の首領なり。

三九　肖像　後藤艮山（一六五九——一七三三）　吳秀三出品

古方家の宗師にして名古屋玄醫（一五二八——一六九六）首倡の後を承け、香川修德（一六八三——一七五五）山脇尙德（一七〇六——一七六三）吉益爲則（一七〇二——一七七三）等に前驅せる人なり。香川修德の行餘醫言は、實に古方家醫學の神髓を集めたるものなり。

四〇　一本堂行餘言　香川修德（一六八三——一七五五）撰　刊行年代　一七二九　十六冊　版本　帝國圖書館出品

卓越せる見識、該博なる經驗より、古醫方の見地によつて大成したる內科書なり。

四一　傷寒論　漢の張機撰　晉の王叔和編　著作年代　三世紀の初　一冊　刻本　吳秀三出品

四二　金匱要略方　漢の張機撰　晉の王叔和編　著作年代　三世紀の初　二冊　刻本　吳秀三出品

四三　肖像　吉益東洞（ヨシマストウドウ）（一七〇二——一七七三）　吳秀三出品

所謂古方家の最大權威なり。古方家といふは後世家に對し、秦漢の醫學素問靈樞傷寒論・金匱要略を金科玉條とし獨自の經驗を本として、晉唐以來二千餘年の空論を排斥し立說したるなり。萬病一毒以て毒攻て毒の說を立て、醫斷を書き綴りたり。彼が藥石に就きて其功能を我實驗より說きたるが藥徵なり、其處方を集めたるが類聚方なり。子吉益南涯（一七五〇——一八一三）益其說を補足して吉益流の學說門人は一時日本全國に滿ち〳〵たり。

四四　藥徵　吉益東洞（一七〇二——一七七三）撰　刊行年代　一七七一　三冊　版本　帝國圖書館出品

四五　藥徵續篇　村井椿壽（一七三三——一八一五）撰　刊行年代　一八〇〇　二冊　版　帝國圖書館出品

村井椿壽は吉益東洞の門人にして此書は藥徵の補修なり。

四六　東洞全集　吳秀三輯　刊行年代　一九一八　刻本　一冊　吳秀三出品

吉益東洞の重要なる著述を集め卷首に東何の詳傳を添へたり。

四七　肖像　多紀元簡（一七二五——一七九二）　吳秀三出品

後世家・古方家の外に於て、主として支那の諸家の方論を考證して折衷の學說を立てたり。父元孝・子元胤・元堅・孫元昕・元佶・元琰は皆江戸幕府の侍醫又は醫學教授として一時の醫權を掌握せり。

四八　傷寒論輯義　多紀元簡撰　刊行年代　一八〇一　十冊　吳秀三出品

漢方醫學者の何人も科條とする傷寒論の穩當優良なる解釋書なり。

四九　金匱玉函要略輯義　多紀元簡撰　刊行年代　一八一二　十冊　刻本　南葵文庫出品

同金匱要略の穩當優良なる解釋書なり。

五〇　素問識　多紀元簡撰　刊行年代　一七八七　九冊　刻本　南葵文庫出品

同素問の穩當優良なる解釋書なり。

五一　素問紹識　多紀元堅撰　著作年代　一八四五　二冊　寫本　吳秀三出品

多紀元簡の素問識を紹述せるものにて多紀元堅自筆本なり。

五二　雜病廣要　多紀元堅撰　著作年代　一八三〇——五〇　六十卷　寫本　富士川游出品

右考證派に屬する多紀元堅が、江戸幕府所藏の豐富なる支那醫書より、病に從ひて定義・原因・證候・治療方等を取捨し輯錄したるものにして、漢方醫學書中にて最もよく廣く編纂されたり。

五三　新撰病草紙　大膳亮道敬著　著作年代　一八五〇　一卷　寫本　富士川游出品

大膳亮が江戸幕府醫學館助教にて醫學館にて實驗せる病症を古の病の草紙に倣ひて繪卷物にしつらひたるものなり。

第二　醫學の各分科に關して

此部に於ては醫學各科につき、近世に於て特に發達せるもの又は特殊の科目につき、主として漢方醫家の代表的著作及び西洋方醫家の最初の著作を擧げたり。

一　解剖學

我邦に解剖學の起りたるは、室町時代の終に我邦に入りて而も甚だ振はざりし西洋醫學の影響によることなるも、而も此實驗學派の先鞭となりし解剖は、所謂蘭學者の着手によらずして、漢方醫殊に古方家によりて初められたり。

五四　肖像　山脇東洋（一七〇六——一七六三）　吳秀三出品

山脇東洋は古方家の大家にして、寶曆四年（西曆一七五四）刑餘の屍を解剖して、臟腑の位置其が支那醫學の說に相違するを發見して、素問・靈樞などの學說に疑を起したり。是れ我邦に於ける人體解剖の嚆矢にして、その解剖記事なる臟志は、有名なる杉田玄白等の解體新書（一七七四）に先だつこと十五年なり。

左にそれより以前及び其後の解剖智識を圖書によつて次第し列擧すべし。

五四　五臟六腑圖　梶原性全撰　著作年代　一三一五　一冊　寫本一　富士川游出品

五臟六腑の圖は萬安方第五十四卷に載する所にして、支那の古圖に據ること明らかなり。西洋にて內臟を一分に畫きたるは、マグヌス、フントの解剖圖（十五世紀の末）を以て最も古きものとす。これに比較對照して興味多大なるを覺ふ。

五六　骨度正誤圖說　村上宗古撰　著作年代　一七二六　三冊　寫本　慶應義塾出品

五七　經絡圖說　伊澤棠軒（一八三四——一八七五）著　一冊　富士川游出品

五八　減志　山脇尙德（一七〇六——一七六三）著　出版年代　一七五九　二冊　刻本　慶應義塾出品

漢方の古方醫學の泰斗たる山脇氏の解剖記事にして我邦人體解剖の嚆矢なり。

五九　男女內景眞圖　山脇玄侃（ヤマワキゲンカン）（一七三六——一七八二）　著作年代　一七七五——六　二卷　寫　吳秀三出品

山脇玄侃は東洋の嗣子にして、此卷は明和四年と五年に解剖せるときの見取り圖なり。一卷は男屍の解剖に關し、一卷は女屍の解剖に關す。

六〇　解屍編　河口信任（一七三六——一八一一）著　出版年代　一七七二　一冊　刻本　吳秀三出品

河口は其師荻野元凱（一七三七——一八〇六）とともに明和七年（西曆一七七〇）罪囚を解剖したり。此の書には其時の解剖記事を載せたり。荻野は古方家に屬する漢方醫なり。

六一　和蘭全軀內外分合圖　本木庄太夫（モトキシヤウイフ）（一六二八——一六九七）著　出版年代　十七世紀末　一冊　刻本　岡崎桂一郎君出品

元祿年間の著作にして西洋の解剖學を紹介せる嚆矢なり。

六二　詳解內景鈔　本木庄太夫（一六二八——一六九七）著　著作年代　一六八二　一冊　寫本　岡田信利君出品

西洋の學說によつて人體各部の名稱を輯錄せるものなり。

六三　肖像　前野良澤（マエノリヤウタク）（一七二三——一八〇三）　吳秀三出品

九州中津の醫官にて蘭醫の開祖と稱せられ、杉田玄白（次出）中川淳庵（一七三九——一七八六）等と和蘭醫書を會讀せり。杉田玄白等著解體新書は良澤を盟主として成りしものなり。中津の藩主は良澤を稱して和蘭の化者（蘭化）と云へるより、遂に蘭化と號せり。

六四　肖像　杉田玄白（スギタゲンパク）（一七二三——一八一七）　吳秀三出品

杉田玄白は若狹の酒井侯の侍醫にして、前野中川諸氏ともに和蘭の解剖書を反譯し、これを解體新書と名つけて、安永三年（西曆一七七四）に刊行せり。これを前驅として蘭學殊に蘭醫學は大に起りたり。玄白の家は代々外科醫にて、彼は初めて（寶曆七年一七五七）江戸にて和蘭流外科を以て開業せり。

岡田信利君出品

六五　杉氏解體約圖　杉田玄白　出版年代　一七七三　五張　刻

本木氏の解剖圖と略似たるものにして、安永三年（西暦一七七四）出版の解體新書に先だつこと一年、此の如き出版に共筋より故障起らざるや試みのため出版したるなり。

六六　解體新書　前野良澤・杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・桂川國瑞等著　出版年代　一七七四　五冊

吳秀三出品

明和八年（西暦一七七一）江戸小塚原に罪囚解剖の擧あり。前野良澤・杉田玄白等諸氏往きて之を見、且つ携へ行きたる蘭書解剖圖譜 Johann Kulmus, Tabella anatomica に照せしに、實に符節を合はすが如くなりしかば、此諸氏相謀て其圖說を飜譯せんとし、翌日より起業、四年の星霜を經て飜譯大成せしかば、玄白之を記述し五卷として之を公にせり。此書即ち是なり。

六七　重訂解體新書　大槻玄澤（一七五七——一八二七）重訂　出版年代　一七九八　十三冊

六八　同銅版全圖　大槻玄澤訂　出版年代　一八二一及一八四三　二部　版本

吳秀三出品

六九　同銅版全圖　大槻玄澤訂　出版年代　一八二一　一帖

武谷水城出品

右は天保十二年（西暦一八四一）筑前博多の舊柳町濱に於て、武谷元立等が擧行したる屍體解剖の時に使用したるものなり。

七〇　解體瑣言　柚木太淳（？——一八〇三）著　刊行年代　一七九七　一冊　刻本

吳秀三出品

京都の眼科醫柚木氏が寛政八年（西暦一七九六）に解剖せる記事を載す。

七一　木骨　星野良悅（一七五四——一八〇二）作　此年江戸に齎して杉田等に示したり　一七九三

後藤倫四郎君出品

廣島の醫師星野氏が脫臼治療の研究上、骨骼の詳細なる知識を必要とするより、原田某と云へる細工人に命じて刑屍の骨につき摸造せしものなり。

七二　木骨各務文獻（一七五五——一八一九）作

東京帝國大學解剖學教室出品

大坂の整骨家各務氏が、治療上參考用として細工人に命じて作らしめしものなり。

七三　木骨考　富士川游・吳秀三著　刊行年代　一八九三　一冊　活版

吳秀三出品

明治二十六年擧行せる醫家先哲追薦會と題する冊子に附したるものにて、星野各務二氏の木骨を記述せるなり。

七四　解屍新篇　晁俊章著　著作年代　一七九二　一冊　寫本

富士川游出品

晁氏が寛政五年（西暦一七九三）に屍を解きて視たるその所見によつて著はしたるものなり。諸葛琴臺の鑑校とし原南陽の序文あり。

七五　施藥院解體圖　三雲環善著　著作年代　一七九八　二卷　寫本

富士川游出品

施藥院三雲氏が刑屍を解視し、吉村蘭洲が寫生せるを吉村考敬が寫せるなり。

七六　施藥院解體圖　三雲環善著、木下應受畫　著作年代　一七九八　原寫一卷

富士川游出品

施藥院三雲氏が刑屍を解視し吉村蘭洲が寫生せるを、木下應受（丸山應鼎の子）が寫せるものなり。

七七　婦人内景之圖　各務文献（一七六五——一八二九）著　著作年代　一八〇〇　一卷　富士川游出品

七八　醫範提綱　宇田川玄眞（一七六九——一八三四）著　刊行年代　一八〇五　三冊　吳秀三出品

西洋の學説によりて、全身の内景卽ち臟器の形質官能を記したるなり。

七九　醫範提綱圖　宇田川玄眞著　刊行年代　一八〇八　一冊　銅版　吳秀三出品

我邦に於ける銅版解剖圖の嚆矢なり。

八〇　解體發蒙　三谷樸著　刊行年代　一八二三　五冊　刻本　吳秀三出品

享和二年（西暦一八〇二）の解剖を本とし、西洋の解剖説を和漢の醫説に照らし、又我邦の前輩の實驗に參考して記述評隲したり。

八一　解剖存眞圖　南小柿寧一著　著作年代　一八一九　一卷　原寫　慶應義塾出品

淀藩の南小柿氏が、文政二年（西暦一八一九）の自家の解剖を本として、諸書に比較し描寫したり。桂川國寧の漢文序、大槻茂質・宇田川玄眞・杉田立卿の國文序跋、シーボルトの題詞等あり、精密なる西洋風の解剖圖なり。南小柿氏は重訂解體新書刊行の際、その描圖を依囑されたる人なり。

八二　解臟圖賦　池田冬藏著　刊行年代　一八二三　一冊　刻本　吳秀三出品

越前の池田氏は醫家小森玄良・藤林淳道の門人にして文化九年（西暦一八一二）解剖せり。本書にはその記事を載す。

八三　導窺私錄　同補　小出龍著　刊行年代　一八三六　五冊　刻本　吳秀三出品

備後の小出氏は天保二年（西暦一八三一）以來大坂に於て刑屍を解くこと、男女十餘人に及びその實驗によつて此書を著はせり。

八四　天保十二年武谷元立等解剖の際屍體解剖場に上げたる掲示　武谷水城君出品

八五　同申告解屍者靈文　武谷水城君出品

右解剖の際その盟主及本刀たりし百武萬里が告文なり。被解剖者（罪人）は元同人の僕なりしと云ふ。武谷・百武ともにシーボルト門下なり。

八六　春風發育圖解　船曳卓堂著　著作年代　一八四九　一卷　寫　東京帝國大學醫學部解剖學教室出品

婦人科醫船曳氏が作りし胎兒發育より分娩までの圖なり。

八七　解剖圖史　Choulant's Geschichte anatomischer Abbildungen. 1852.　富士川游出品

その中にマグヌス、フントの解剖圖あり。

二　産　科

産科は我日本に於て獨創的に種々の手術を發明せられ、且つ大に發達を遂げたり。賀川流は其中にて最も優れたるものなり。

八八　肖像　賀川玄悅（一七〇〇——一七七七）　吳秀三出品

賀川氏は手術と云ふ手術の殆んど全く是なかりし時代に於て、漢方醫として獨創の意見を以て産科を建立し、回生術、破碎術等を發明して難産を救ひ、我醫界に重きをなしたる人にして、子孫に賀川玄廸・滿郷・滿定・滿崇・滿載・門流に片倉元周・奥道逸・水原義博等ありて種々發明の術式器械あり。

八九　子玄子産論　賀川玄悦著　刊行年代　一七六六　一冊　刻本　　昊秀三出品

賀川玄悦の産科に關する學説經驗を述べたり。

九〇　産論翼　賀川玄廸（一七三九——一七七九）著　刊行年代　一七七五　二冊　刻本　　帝國圖書館出品

九一　賀川氏分娩兒圖　著作年代　一八三八　一卷　寫本　　富士川游出品

九二　南陽館一家言　賀川南龍著　刊行年代　一八三八　一卷　刻本　　富士川游出品

賀川氏が天保六年（西暦一八三五）刑罰屍を解剖せるにて其者には、子宮肉腫ありたり。

九三　産航　桑原惟親著　刊行年代　一八一三　二冊　刻本　　岡田信利君出品

九四　産科新論　立野龍貞　刊行年代　一八一九　三冊　刻本　　富士川游出品

種々の器械殊に包頭器を擧げたり。

九五　探頷圖訣　水原義博著　刊行年代　一八三四　三冊　刻本　　昊秀三出品

賀川流産科の書にして發明の産科器械及び方術あり、挿圖も多く日本産科發達史上有益の書なり。

九六　産育全書　水原義博（一七八二——一八六四）著　刊行年代　一八四九　七冊　刻本　　富士川游出品

九七　賀川氏産科器械

整横紐一　纏頭絹一　鉤二　鉗子一　剪刀一　小刀一合　七具。

産科器械用法書　右賀川氏器械及び用法を記載し、整横紐纏頭絹其他の圖あり、産科叢書の第二十號に收む。

九八　日本産科叢書　皆田知正　昊秀三　富士川游　選校　刊行年代　一八九五　一冊　活版本　　昊秀三出品

日本に於ける重要なる産科に關する書物五十九種を收め數多の圖畫を挿入す。

九九　産科器械　六個入木箱　一箱　　長崎縣立圖書館出品

蘭醫シーボルトが長崎を去るときその愛孃楠本いね子に傳へ、いね子より更に其女たか子に傳へ、たか子これを携へて山脇長崎病院副長に嫁せしが、明治十六年長崎病院長吉田健康が新町の私邸に開業せしとき同氏に贈られ、吉田氏開業二年の後廢業し、久布白兼德をして其の業を繼がしめ、久布白氏の佐賀より鹿兒島に歸るとき之を吉田氏より受けたるなり。大正十四年四月シーボルト渡來百年記念會のとき、久布白氏之を長崎圖書館に寄贈したり。

三　外　科

支那には今日所謂外科なるもの殆んど之なし。日本に於て德川時代の初より和蘭よりして外科學入りたれども、十分の發達を遂げざりしが、華岡氏漢方より出で、蘭方に折衷し、十九世紀の初め自家の發明せる麻醉劑を用ひて、大膽なる一家獨創の手術をなし、輓近蘭學外科者流よりも、優れた

る手術治療を行ひ明治の初めに及べり。

い　支那の外科書の一つ

一〇〇　外科正宗　明の陳實功著　伊良子光顯書入　刊行年代　一六一七　四冊　刊本　伊良子光義君出品

支那外科書中重要なるものにして、日本にて多く用ひられしが、本書はそれをカスパル流外科醫の伊良子光顯が注釋批評せるものなり。

ろ　南蠻流及和蘭流外科の書物

一〇一　南蠻流忠庵外科書　著作年代　凡一六〇〇　一冊　刻本　富士川游出品

澤野忠庵 Christpian Ferrera の外科說を筆記したるものなり。

一〇二　伝　檜林鎭山（一六三三——一七一一）　吳秀三出品

和蘭流醫學及び和蘭通詞の先輩にして、和蘭外科宗傳を著せり。慶安中（西暦一六四九）我邦に來りしカスパル、スハンベルヘン Caspar Shamberger より起りし、カスパル流外科に河口良庵と云へる人、又伊良子光顯と云へる人あり。

一〇三　阿蘭陀外科宗傳　檜林鎭山著　長崎醫科大學出品

檜林氏が外科手術綴帶等につき著作したるものにして、西玄哲吉雄耕牛・伊良子光顯等の著作と同樣のものにて、アンブロア、パーレー Ambrois Paré の外科書より抄し出したるものゝ如し。

一〇四　蕃國治方的傳　嵐山甫庵（アラシヤマホアン）著　著作年代　一六七五頃　一冊　寫本　富士川游出品

嵐山氏が其師たりしダンネル（寛文三年、西暦一六六三來朝）パルム（寛文六年、西暦一六六六來朝）の口述を筆記せるものなり。

一〇五　カスパル傳方　河口良庵著　著作年代　一六六一　一冊　寫本　富士川游出品

カスパル、スハンベルヘン來朝後十三年の述作なり。

一〇六　アルマンス方書　河口良庵著　著作年代　一六六一　一冊　寫本　富士川游出品

アルマンス、カッツ Almans Kuz は寛文九年（西暦一六六一）來朝せる人なり。

一〇七　外科宗傳書圖　檜林榮哲（一七三七——一七九七）著　著作年代　一七一四　一卷　寫本　富士川游出品

一〇八　スチーピン外科秘傳書　著作年代　一六七三　一冊　富士川游出品

スチーピン Steven は延寶元年（西暦一六七二）來朝せる人なり。

一〇九　阿蘭陀外科傳記　吉永昇庵著　著作年代　一六八一　一冊　寫本　富士川游出品

一一〇　外科要訣全書　河口良庵著　著作年代　一七一一（？）　五冊　寫本　河口久雄君出品

一一一　阿蘭陀外科正傳　河口良庵著　著作年代　一七一一　三卷　一冊　河口久雄君出品

一一二　金瘡師語錄　河口良庵著　著作年代　一七一一　二卷　一冊　河口久雄君出品

一一三　金瘡跌蹉療治之書　西玄哲著　著作年代　一七三五　一冊　寫本　吳秀三出品

一一四　肖像　吉雄耕牛（一七二四――一八〇〇）　　昊秀三出品

吉雄氏は和蘭通詞にして外科に精しく門人六百餘名に至る。その著因液發備は西洋診斷學の嚆矢なり。

一一五　吉雄耕牛傳授卷物　年代一七七九――八三　一卷　各自筆　　昊秀三出品

吉雄耕牛・吉原元棟が、外科・整骨科を門人へ傳授の證文なり。吉雄には紅毛文字・紅毛方言纏帛法・打脈法・腹診法・刺鍼法・治創法・療瘍法・整骨法等十法の傳授あり。

一一六　外科訓蒙圖彙　伊良子光顯（一七三七――一七九八）著　刊行年代　一七六九　二冊　刻本　　佐伯理一郎君出品　伊良子光鶴君出品

一一七　伊良子氏金瘡趺蹼療治之卷　一卷　寫本

卷末に伊良子光顯の印あり。和蘭醫が長崎に傳へし外科手術・矯正術の圖卷なり。

一一八　南蠻流藥製　著者不明　著作年代　？　一冊　　伊良子光鶴君出品

南蠻流諸藥の製法を擧げたるが、何れも德川時代末期に用ひられたる藥材のごとし。

一一九　伊良子氏の施用したる外科器具　　伊良子光鶴君出品

鋏形止血鉗壬二刀一　鳥啄形破碎子　一　竹籠（竹にて作りたる籠狀の副木）四　咽喉器二　壓台一　鐵鑷二　縫合針十數本（箱入）　瘻孔刀三　開口器一　球頭消息子一　鯨鬚匙一　寛政中に購求したる柳葉一箇　人鉾鑷一包。

一二〇　アンブロア　パーレーの外科書

Ambrois Paré の外科書にして、我邦の蘭方外科として行れたるは、此書によりて入れるものゝ如く、西氏・吉雄氏・伊良子氏乃至華岡氏の外科的圖畫には、之に似たるもの多く中には全く臨摹せる如き圖畫もあり。

は　華岡流の外科

一二一　肖像　華岡隨賢（一七六〇――一八五三）　　昊秀三出品

漢方醫にして和蘭外科に參酌して、手術的治療に志さし、草烏頭 Aconitus を主とせる麻醉劑を作り、先づ乳癌より其他種々の手術に及びたり。乳癌を摘出せるは一八〇五年にして、東洋に於て從來此の如き大手術をなしたるものなく、是れシーボルトによつて西洋外科術の傳はれし時より二十年前なり。其後彼は猶ほ大いなる、猶ほ放膽なる手術をなして成功を收めたるもの少なからず。門人中、本間玄調・鍵田玄臺等は最も名ある人なり。

一二二　華岡家治驗圖卷　華岡隨賢著　著作年代　一八三八　一卷　寫本　　華岡貞次郎君出品

華岡隨賢が實驗又は手術せる病例の圖にして、多發性纖維腫・陰部象皮病の手術など興味あるもの少なからず。

一二三　外科手術關鍵一覽　　富士川游出品

華岡隨賢の前記圖卷と殆ど同樣のものなり。

一二四　乳巖治驗錄　華岡隨賢著　著作年代　一八〇五　一冊　著者自筆　　昊秀三出品

華岡隨賢が第一着に成功したる乳巖摘出の治驗錄なり。

一二五　乳巖截除手術圖　華岡隨賢著　著作年代　一八〇五　一冊　　岡崎桂一郎出品

一二六　華岡氏治術圖識　華岡隨賢著　著作年代　十九世紀初　一冊　富士川游出品

包莖・瘰癧風・舌疽・乳巖・委中毒・失榮・脫疽・鎖鼻・六指・馬刀瘰・酶花瘡・裂口・痔漏・石淋等の手術に關する圖書及び說明なり。

一二七　奇患圖錄　本間玄調（一八〇四——一八七二）著　著作年代　十九世紀中頃　二冊　寫生本　富士川游出品

本間玄調の實驗又は手術せる患例の圖畫にして短き說明を加へたり。

一二八　瘍科秘錄　同續　本間玄調著　刊行年代　一八三七　十五冊　刻本　土肥慶藏出品

右奇患圖錄とともに德川末期に於ける、外邦外科學の狀勢を知るに重要なり。本書殊にその續篇には脫疽腫瘍等の大手術の方式說明等を載せたり。

一二九　外科起癈　鎌田玄臺（一七九四——一八五四）著　刊行年代　一八五一　十冊　刻本　吳秀三出品

本間氏は關東にありたれど、鎌田氏は四國にあり、その學識並びに、技術は中々に優越なりし如く、所說に於て手術に於て、互に見劣せざるは、其幾多術式を圖畫と記載とに示せる本書に見て知るべし。

一三〇　華岡氏所用外科器械十八點　華岡貞次郎君出品

毛引ヤットコ・刀・毛引反鋏・小鋏・毛引長鋏・膏藥切鋏・長小鋏・乳巖切小刀・膏藥煉・小丸鋏・反鋏銀舌押・無名器・打形鋏・毛引細鋏・サグリ針（四本）・ヒストルメス。

に　近世の西洋外科の書

一三一　大槻玄澤（一七五七——一八二七）　肖像　吳秀三出品

前野・大槻に尋ぎて起りたる蘭醫學者にして、蘭語學に於ては蘭學階梯を著はして後進の研究に資し、醫學に於ては瘍醫新書（ヘーステル外科書譯）を出して、西洋外科學を我邦に紹介し、その著六物新志・蘭錄は、又藥物學の端緒を開きたり。

一三二　瘍醫新書　大槻玄澤著　著作年代　一八二二　五十冊　刻本　富士川游出品

ローレンツ、ハイステル（後出）の外科書の反譯にして、誘導編・手術編・創痍論・縛帶編・刺絡編・骨傷脫臼編等あり。刻本卷首に杉田玄白・大槻玄澤・桂川國寧參閱とあり。

一三三　布斂吉外科書（ブレンク）　吉雄永保（一七八五——一八三一）　著作年代　？　三冊　富士川游出品

Joseph Jacob von Plenck 著の Compendium institionum chirurgicum を譯述したるなり。

一三四　瘍科新選　杉田立卿（一七八六——一八四六）著　著作年代　一八三〇

一三五　外科必讀　箕作阮甫（一七九九——一八六三）著　著作年代　？　六冊　著者自筆　吳秀三出品

一三六　Heister's Heelkundige onderwijssingen, Amsterdam, 1755.　佐伯理一郎君出品

カスパル流の外科の專門家伊良子氏の舊藏書にして、德川時代に我邦に渡りたるものなり。

一三七　戸塚靜海（一七九九——一八七六）　肖像　吳秀三出品